

マラウイラウンドテーブルによる 教育の向上とその普及

マラウイ共和国教育科学技術省教員教育開発局 チャールズ・マオンガ

1. 初めてのファシリテーターとオーガナイザー 経験からの学び

ラウンドテーブル開催にあたりマラウイを選んできたことを嬉しく思います。私個人としては、どのようにファシリテーターを行なうか、どのようにこのような活動を計画するのかなど、多くのことについて学ぶことができました。今回の経験を通して、次回のラウンドテーブルを開催する自信をつけることができたと感じます。その際には、ラウンドテーブルについて、より理解できると確信しています。また、ラウンドテーブルを持続させるための重要な新しい技能を身につけることができたため、ファシリテーターとしての役割は大変素晴らしいものとなりました。ファシリテートすることは容易ではありません。ファシリテートできるという意味は、誰もが学ぶことができるように、より意味のある会話を引き出すことができることです。次回のラウンドテーブルの際には、よりよい働きができると思います。

また、福井大学教職大学院のスタッフは非常に素晴らしいです。皆さんの発表は理解しやすく、分かりやすかったです。当初は、全てを成し遂げるには1日では不十分だと思っていました。しかし、プログラムの流れと計画のおかげで、全ての活動が誰にでも簡単に行なうことができました。全てのグループから良い報告を聞いて、たいへん嬉しく思いました。特に学習や生徒に関する、コメントや質問が印象的でした。私個人としては、ラウンドテーブルは大成功であったと思います。次回のラウンドテーブルを楽しみにしています。

次回ラウンドテーブル開催に向けて、2つの事を学ぶことができました。一つ目はレポートに関することです。参加者は「三つの種」に関するレポートを持ってくるように知らされていきました。しかし、一部の学校では限られたリソースのため、全参加者がそうすることができませんでした。もし全参加者が「三つの種」のレポートを読んでいたなら、ラウンドテーブルはより良くなっていただいでしょう。さらに、グループ内で起こった議論は、誰かがメモを取り、後でまとめると役立ったと思います。このようにすることで、各グループからより多くのことを学び、学校や教育省に資料を提出し、そこでの議論を記録することができます。これはまた、教育省がより多くの報告書を学校教員から入手することにも役立つでしょう。二つ目は、グループについてです。次回のラウンドテーブルでは、午前中にはホームグループを組み、午後にはクロスグループを組むことができると思います。今回のラウンドテーブルではその時間はありませんでしたが、より多くの経験を交流する機会のために、将来そのようにできることを願っています。

目次

巻頭言 (1)
マラウイ視察レポート (4)
マネジメントコースだより (8)
インターンシップ/週間カンファレンス報告 (10)
合同カンファレンスに参加して (14)
研究集会案内 (17)
スケジュール・編集後記 (20)

全体として、今回のラウンドテーブルは大成功でした。私たちは、お互い、そして日本のカウンターパートと一緒に学ぶことを満喫しました。これは私、そしてマラウイにとって重要な節目です。

2. マラウイの教育におけるラウンドテーブルの役割

ラウンドテーブルを経験するのは、マラウイの教育関係者にとって今回が初めてでした。特筆すべき点は、グループが少人数かつ異なる背景を持つ教員で構成されていることです。誰もが発言する機会を有し、新しいアイデアを得ることができるため、これは非常に重要です。また、若い教員が教えることに対してより意欲を持てる機会となりました。経験豊富な教員の話を通して、日々の課題にも関わらず、教員を継続することに対して自信を与えました。

今回のラウンドテーブルでは、教員はまた他の学校がどのように各学校の課題を解決しているかについて学びました。全ての教育機関は固有の特徴を持ち合わせているので、議論は参加者に新しい視点をもたらしました。例えば、私のグループでは、シラバスを全て終わらせることができないために、学習者中心の授業を行ないたくない、指摘されたことのある指導主事の経験について話し合いました。この教員はシラバスを終わらせることとテストのために授業を行なっていました。しかし、他のグループメンバーから、生徒中心型授業の長期的な効果について共有がありました。教師中心の授業では生徒は大学入試に合格することはできますが、結局は進学後失敗します。大学においては、より自律的な学びが期待されています。

ラウンドテーブルを通して、様々な教育関係者の意見やアイデアが交流されました。学校教員は

行政や管理職の視点を学ぶことができ、同時に私たちは学校教員の現状を学びました。このようにして、私たちは教育システムを少しずつ改善することができます。

3. マラウイラウンドテーブルの将来と教職大学院との協働について

マラウイの教育の主な目的は、創造的かつ我が国に積極的に貢献できる市民を育てることです。また、世界で起こっていることや、世界が向かう方向性について理解できるような、よりグローバルな人材育成を目指しています。教育はダイナミックです。日々変化しています。我々は取り残されたくありません。そのために、教員に関する課題を解決しようとしています。我々教員も同様にダイナミックであることを願っています。

昨年の福井での経験を通して、マラウイの学校が学ぶことができる、少なくとも福井で観察したようなモデル校を1つつくることを構想しています。ナリクレ教員養成大学の教員が、今年度11月の福井大学教職大学院の課題別研修に参加することから、ナリクレ教員養成大学附属学校から始めることを考えています。私たちはこの目標を達成するために、福井と協働したいと考えています。また、毎年ナリクレ教員養成大学で開催予定のラウンドテーブルと連携することができます。

これらは壮大で野心的かもしれませんが、しかし、教職大学院とJICAの支援により、我々はすでに最初のステップを踏み出しました。したがって、今後も我々は継続できるように努めなければなりません。

(翻訳 高阪将人 福井大学教職大学院講師)

※原文は次頁に記載しています。

Malawi Roundtable Towards Improving Education and Making It More Public

Department of Teacher Education and Development,

Ministry of Education, Science and Technology **Charles Maonga**

I. Learning from My First Experience as Facilitator and as Organizer

I would like to say that we are happy as Malawians that you chose to conduct a roundtable here in Malawi. Personally, I have learned a lot of how to be a facilitator, and how to organize an activity like this one. Because of this experience, I feel that I am now empowered to organize the next roundtable. All the discussions and conversations were meaningful. I am feeling confident that I can better understand events next time. Also, my role as a facilitator is a wonderful experience as I gained a new skill crucial to sustain this roundtable. Facilitating is not easy; but being able to facilitate means to be able to draw more meaningful conversations so that everyone can learn. I think that I will be able to do a better job next time.

The professors from DPDT are all wonderful. Their presentations are easy to understand and to follow. At first, I thought that one day is not enough to accomplish everything. But because of the program flow and the design, all the activities were made easy for everyone to follow. I was delighted to listen to those good reports also from all the groups. I enjoyed the comments and questions that came from all the groups especially about learning and students. I personally think that the roundtable is very successful. I am looking forward to the next one.

There are two areas that we all can learn from which I hope to implement in the next roundtable. First is regarding the reports. They were informed to bring their three seeds. But because of limited resources in some schools, not everyone was able to do so. Roundtable would be better if everyone read their three seeds too. Moreover, I think that discussions which transpired in the groups were valuable that someone can take down notes and compile these later. This way, we can learn more from each group, furnish our schools and the Ministry of Education with a copy, and not forget the conversations that transpired. This will also help the ministry to have more written documents from school teachers. The second point is on groupings. We can have home groups in the morning and cross groups in the afternoon in the next roundtable. We did not have time for

it last October 18 but I hope that we can in the future so that there will be more chances to exchange experiences.

But overall, it was a very successful event. We all enjoyed learning from each other and with our counterparts from Japan. This is indeed an important milestone for me and for Malawi.

II. The Role of Roundtable in Malawi's Education

It was the first time for Malawian educators to experience such an event. For one, the groups are small and are composed of teachers from different backgrounds. This is very important because everyone gets a chance to speak and to gain new ideas. It was also an opportunity for young teachers to be more motivated about teaching. Listening to more experienced teachers encouraged them to stay in the field despite their daily challenges.

In this roundtable, teachers also learned about how different schools solve their schools' challenges. Every institution is unique so the discussions brought in new perspectives to the participants. For example, in my group, we discussed about the experience of an inspector who was told by a teacher that she did not want to implement learner-centered classes because doing so means that she will not be able to cover everything in the syllabus. So, this teacher was just teaching for coverage and for the test. But another group member shared the long term effect of this kind of teaching. The students are able to enter the university but end up failing at the university. Students are expected to be more independent learners in the university.

Through the roundtable, there were exchanges of sentiments and ideas from different kinds of institutions. School teachers can hear the perspective of the administration; at the same time, we learned where school teachers are coming from. This way, little by little, we can improve our education system.

III. The Future of Malawi's Roundtable and Collaboration with DPDT

The main purpose of education in Malawi is to produce citizens who are productive and who can contribute positively to our country. Also, we aim at educating our

learners to be more global... to be aware of what is happening in the world... to understand where the world is going. Education is dynamic. It is changing everyday. We do not want to be left behind. So, this is why we are trying to solve issues concerning our teachers. We want our teachers to be dynamic as well.

Our visit last year to Fukui schools made me think of creating at least one excellent model school like that in Fukui in which the other schools in Malawi can learn from.

I am thinking of starting with Nalikule College's demonstration school because one of its teacher is joining the JICA-DPDT program this November. We would like to team up with them and Fukui to achieve this goal. We can combine this with the roundtable every year which can also be held at Nalikule College.

These may be big and ambitious. Through the support of DPDT and JICA, we already started our first few steps. So, we just have to make that we continue all this.

アフリカ・マラウイ 視察レポート

Reports and Reflection: Inspection in Malawi, Africa

マラウイの教育者達の挑戦

福井大学教職大学院 准教授 半原 芳子

2017年10月17日～20日の日程で、三田村彰先生、Elizabeth Hartmann先生、高阪将人先生、Pauline Mangulabnan先生と共にマラウイ共和国（以下、マラウイ）を訪問してきた。福井大学は今年度「日本型教育の海外展開推進事業」（通称「EDU-Port ニッポン」）に採択され、今回のマラウイ訪問はその一環でもあった。福井大学教職大学院では昨年度から JICA の課題別研修が先行して始まっており、2016年度はそこにマラウイから二人の教育者が参加していた。一人は教育科学技術省教員教育開発局の中央研修講師であるチャールズ・マオンガさん、もう一人はムサルラコミュニティ中等学校の数学教員であるビクトリア・マクングラさんである。今回4日間の滞在期間中、JICA マラウイ事務所、教育科学技術省、Victoriaさんの学校の訪問、ラウンドテーブルの開催、ナリクレ教員養成大学視察等を行った。どれも印象深く自分なりに考えることが幾つもあったが、最も印象的で胸を打たれたのはやはりビクトリアさんとチャールズさんのチャレンジであった。ビクトリアさんはマラウイではほとんど行われていないというグループ学習に挑み、チャールズさんはアフリカ初となるラウンドテーブルを我々と共に企画・運営した。以下二人のチャレンジとその意味を記述してみたい。

ビクトリアさんの挑戦—自分がいる状況のなかで可能性を探りながら現状を変えていく

昨年度の JICA の課題別研修（2016年11月8日～11月25日）でビクトリアさんが書き進めた記録

のなかに「Learning never ends, I would also like to continue my studies in the field of education so that I will be one of the educators contributing to effective and active learning for students in Malawi.」という言葉がある。昨年度の課題別研修では、福井大学教育地域科学部附属中学校の授業に立ち会い生徒達の学習過程を辿ったり、福井市安居中学校の公開研究会への参観を通じ先生達同士が学び合うコミュニティを醸成していることに触れたり、実践記録の検討やエティエヌ・ウェンガーらの「コミュニティ・オブ・プラクティス」およびドナルド・A・ショーンの「省察的实践とは何か」を読み進め事例研究を行った。上述のビクトリアさんの意志はそうした探究のなかで確認され培われていったものだと想像する。今回私が目にしたビクトリアさんの数学の授業は、生徒達がグループで「 $x-2y=-3$, $x+y=3$ 」の解法を考えるものであった。高阪先生によると、今年2月に高阪先生がビクトリアさんの学校を訪ねた際はグループ学習にチャレンジし始めたばかりの頃で模索の段階だったという。グループ学習がほとんど行われていないマラウイにおいてグループ学習を始めるだけでも大変なことだったと思うが、それから8ヶ月後の今回、ビクトリアさんの授業では生徒達の学習をより良く支えるための工夫が随所に凝らされていた。生徒達は頭をくっつけ合いながら解を模索し、その過程を模造紙に書き表す。グループによって解法が異なり、それがグループを超え全体で共

有されるなかで生徒達は自分達のものとは異なるアプローチに触れ、もう一度自分達のアプローチを再吟味する機会を得る。この授業を一緒に計画したという同僚の先生方も数名ビクトリアさんと共にグループをまわり、生徒達の学習をサポートしていた。

1年ぶりに再会したビクトリアさんは、昨年度自身のなかに芽生えた意志をその後も大事に育て、自分がいる状況のなか (*in the field of education*) で可能性を探りながら現状を変えていっていた。おそらくここに至るまで困惑も苦悩も沢山あったと思う。それでもビクトリアさんは今後も努力を続けていくのだろう。そして、ムサルラという彼女のいる地点から、マラウイという国の教育の現状を変えるうねりを生徒達と、そして同僚達と共につくり出していくのだと思う。

チャールズさんの挑戦—マラウイの教育者のコミュニケーション構造を編み直す

マラウイでは 2004 年から JICA の協力のもと現職教員研修制度の構築が進められている。まずは「カスケード方式」すなわち中央研修講師が地方研修講師に伝達を行い、それを地方研修講師が学校教員に伝えていくというアプローチが導入され、2013 年からは「クラスター方式」と呼ばれる地域の学校同士が集まる授業研究が本格化した。つまりマラウイはこの十数年の間に現職教員研修が立ち上がっただけでなく、二つのモードの研修を経験していることになる。今はその二つが補完し合いながら進んでいるとのことである。当時、そして現在において、クラスター方式による教員研修も画期的なものだと想像するが、今回中央研修講師であるチャールズさんは更に異なるモードの研修を企画し実施した。それがマラウイラウンドテーブルである。チャールズさんは教師が生涯学び続けることの大事さと、現場が抱える問題は固有かつ多様であるとの認識から、教師同士がそれぞれの経験から学び合えるコミュニティ (*Community of Practice*) をつくりたいと考え、マラウイラウンドテーブルを立ち上げた。初回となった今回、チャールズさんの上司である教育科学技術省のチーフダイレクター、地区研修講師、校長、教員ら合計約 30 名が参加した。おそらくカスケード方式では決して交わることのないメンバーであったと思う。当日は参加者がお互いの立場を超え、共に実践を交流し合った。私がいたグループのメンバーはベテランのチェワ語 (現地語) の女性教員、若手の物理の男性教員、中等学校の教員であり地区研修講師の男性、そして JICA マラウイ事務所の教育担当者という構成であった。みんなやや緊張した面持ちではあ

ったものの、どうして教員になったのか、現在直面している課題は何か、自分達をめぐる状況 (教育制度) がどのように変わっていったのかなどを自分達の言葉でゆっくり丁寧に語っていった。自身の英語力の未熟さもあり、正直マラウイの先生方が話していた内容が十二分に理解できたとは言いがたい。しかし、マラウイラウンドテーブルにて私の目の前に広がっていたのは、これまで (カスケード方式によって規定されていた教員間) のトップダウンの関係性とコミュニケーション構造がゆっくりと編み直されていく光景だった。

また、今回ラウンドテーブルの企画と運営をチャールズさんが独断かつトップダウンで行ったのではないことも特筆すべきことだと思う。今回、国にたった 6 名しかいない中央研修講師といういわば“上層部”のチャールズさんが強制的にラウンドテーブルを行うこともできただろう。しかしそうではなく、チャールズさんはここに至るまで上司の理解を得ながら、そしてビクトリアさんと情報・意見交換を行いながら、時間をかけ丁寧に準備を進めてきた。より良いコミュニケーションとより良い関係性の構築のなかで立ち上がったラウンドテーブルは、1 回限りの「イベント」で終わるものでは決してないだろう。マラウイラウンドテーブルは、しばらくはチャールズさんが牽引していくものと思われるが、チャールズさんの背中を次世代の教育改革を担う若い世代が見ている。マラウイラウンドテーブルの翌日は、チャールズさんと次の課題別研修で福井大学に来る地区研修講師およびナリクレ教員養成大学教員を含む 4 名との意見交換会が行われた。その様子を見ながら、マラウイにおいて持続可能なコーディネーターコミュニティが誕生しつつあることを感じた。

今回マラウイを訪ね教育改革に向けた試行錯誤を見聞きするなかで思ったことは、日本が直面している課題と大差がないということだった。おそらく世界のどこの国や地域も同じような課題に直面しているのだろう。教育改革のプロセスをつくりだすことは、まるで沼地を這うような大変なしんどさを伴うものである。しかし、今回マラウイの教育状況を少しでも変えていくためにチャールズさん、ビクトリアさんをはじめとするマラウイの教育者達は自分達のそれぞれの場所で地道な努力を積み重ねていた。その姿を見て頭が下がる思いであると同時に、彼らと同じ時代に生き切琢磨できることを心から嬉しく思った。マラウイの教育者達の「壮大な野心」に伴走し共に学び合えるよう、自分自身を成長させたい。

The First Malawi Roundtable: A Trip to a Class Before Learning from Educators' Experiences

福井大学教職大学院 コーディネーターリサーチャー マングラブナン・ポーリン

The very first Malawi Roundtable was held last October 18, 2017 at Blue Waters by Serendib, Salima, Malawi following up the DPDT - JICA Co-Creation Knowledge Program held in November 2016. The said event was participated by five (5) DPDT staffs, one JICA Malawi representative, representatives and administrators from different districts of Malawi and teachers from Msalura cluster.

Earlier that day, we all went to visit Viktoria Mkungula's Form 1 Mathematics Class as they learn about solutions of Systems of Linear Equations. Other members of Msalura Cluster Lesson Study Group were also present. The class started with a review on solving linear equations in one variable which students did in pairs and a recall of what a system of linear equation is. Before representatives of the class were called to give their ideas, students were first asked to share write down their thoughts on their notebooks. It was followed by a system of linear equations which students explored in their groups of six. The teacher was checking on the groups as the students discussed their solutions and ideas. Although most of the groups opted for an algebraic approach, there were some groups who tried representing the equations in the form of table. One group was stuck as to how to find the solution as they listed down values but it was evident that students were trying to follow their group mates' ideas and contributed to the proposed



method of solution. There was also a group who ended up with a curve, an alternate concept, which they later realized to be wrong. And of course, there are those groups who

were able to solve it correctly which three of them were asked to share their ideas in front. One episode that also caught my attention was when a group continued their solution after hearing the correct answer of the reporters. Instead of blaming each other on their error or just plainly listening to the reporters, students were paid attention to their classmates and compared it to their own group's answers. In spite of the big class size, one can see how students are trying their best to help each other.



The observation was followed by a post lesson discussion in which we all participated in. Because of the lack of facilities, the post lesson discussion was held under a big shady tree. Before we broke down into smaller groups, the cluster head reminded everyone of the protocols for the debriefing. He emphasized that they will use the word 'WE' instead of the 'teacher' or 'she' when giving out comments about the since the lesson was created by everyone in there. Hence, they all shall share whatever the outcomes of the class are -- pleasing or not. And so, the teachers did. Using their lesson study form, we went through the items one by one and discussed it thoroughly. Initially, a facilitator was chosen to lead the itemization. Because general comments were at the end part of the form, the earlier discussions focused on whether the class met the objectives, whether students gained the target skills, etc. Everyone is proactively and positively contributing to the debrief which was very impressive. It also showed how open they are towards learning from the event. That was then when I shared my observations of the class and how we would do it in Fukui. I showed them some of the students written outputs which I had borrowed at the end of the class. My sharing was focused on the works of two groups whom I tried to follow during the activity. It seemed like a new approach for them to actually look at a class by following through students' conceptions. As I had expected, they were very affirmative about how

they can use that to learn from students. In fact, they asked, 'How can we improve our observation form so we can incorporate more students ideas and learn from it?' Admirable, indeed! With teachers like this, I think Malawi will go a long way forward.



After the lesson study, we headed back to the conference venue for the roundtable. The roundtable was emceed by Charles Maonga from the Teacher Education Department of Malawi. The general theme of the whole roundtable is Cultivating a Community of Practice and Reflective Lesson Study in Malawi. Thus, the morning session focused on three seeds; while the afternoon session was on reflective practice record reading and discussion. The Malawi-style roundtable schedule was originally co-planned with Charles before DPDT flew to Malawi. In particular, Charles wanted to give each group a few minutes to share the conversations that transpired in their small groups. Hence, there was a small sharing in the morning and a longer one in the afternoon. Moreover, he



wanted to make that Malawian participants will have more time to speak. Charles had always been a fan of the short lectures of DPDT; so, he had carried this as we co-designed the actual schedule.



In the morning, groups focused on discussing sharing their three seeds in which we talked about reasons for entering the teaching workforce and staying despite all the challenges. Also, sharing about challenges were expanded to how schools try to solve their issues given available resources and manpower. There was also an elaboration on how students' backgrounds and communities affect their notions and attitudes towards school. In my group, we had a long discussion about the termination of national exams for Forms 2 and 3 which is generally not accepted by teachers and parents. One teacher asked the authority from the ministry of education, 'What is the reason behind the removal of the tests? What will be its replacement?' Below is a sharing from one group which basically encompasses the discussions that transpired in the morning.

In our group, our members have been teaching for 6 to 20 years and we looked at the reasons why we chose to teach and chose to stay teaching. Influences to be a teacher were from our families, from former teachers and from the community around us. For the challenges, we looked into shortage of books and materials, work overload, and curriculum reforms like the split of sciences to physics and chemistry. We also discussed some teacher-related issues like teachers not opening up to their colleagues especially regarding lesson and classroom-related difficulties. But we also discussed about how we can solve these problems. We talked about using groups, local materials improvisation, team teaching, and student visits. We do all these because we want to better deliver to our students. We want to help our community and our students.

After the fruitful morning session on getting to know about each other and our practices, everyone were more motivated to go on in the afternoon. Viktoria and Charles shared their experiences in Fukui and expanded it to how can it be used to improve the situation in Malawi. Both of them shared how they had worked together after their Fukui training and invited everyone to join them in their projects. The afternoon discussion after reading a science practice record were focused on how students are learning and how teachers are supporting students' learning in

Malawi. Most of the remarks were positive, insightful and visionary. Everyone agreed that they all hoped and agreed to create a space for Malawian children to be able to inquire about what their surroundings to acquire critical thinking skills, problem solving skills and independence. They agreed that with these three, Malawian students will not just improve in scores but these will make them lifelong learners for the future of Malawi.

I must admit that it was a long trip to fly all the way to Malawi but being greeted by the heart of Africa and listening to these teachers made it all worth it. It is a humbling reminder of my grass roots that teaching minds, touching hearts and transforming lives knows no boundaries.



マネジメントコースだより

道草のすゝめ

学校改革マネジメントコース2年／越前市武生南小学校 加畑 重樹

もともと私は道草をすることが多いが、「最近、道草が多くなってきていますね。」と若手から言われた。「また来たか〜、しつこい」と煙たがられているか否かは不明だが、私自身はそう言ってもらえるとうれしい気分になる。

それは、この夏の集中講座で学んだ『すべては、その構造に問題があり、目の前の問題を解決するのではなく、一般には見えにくい構造そのものにメスを入れることが大切であるという「システム思考」の考え、そして、この「システム思考」を体得するためには、職員自身が互いを良く知り、各自の仕事にも精通し、学校がどのように動いているのかという構造を

知らなければならぬ』ということ意識している現れだと受け取っているからだ。

私の机は職員室の隅に、そして、コピー機は私の机から一番遠い所にある。私の机からコピー機までには、職員40人以上の机が所狭しと並んでおり、コピー機に行くまでには当然そこを通らなければならない。その途中で、ふと気になったことを職員と話してみたりお願い事をしてみたり、あるいは「ちょっと、ちょっと」と呼び止められたりする。そして、そこで話があちこちへ飛び火し、盛り上がっていくこともしばしばである。歳をとったせいもあるが、いったい私は何をしに来たんだろう？と、席を立った目的を忘れてしまうこともある。

私が席についている時でも職員室のどこかで、授業や生徒指導上のことを話し合っている。ICTの苦手なベテランが「分から～ん、誰か教えて～」と叫ぶと、どれどれと席を立てて見に行く若手がいる。だから、私の学校の職員室は静まりかえることがほとんどない。大学院や県教育総合研究所の先生を講師として招き、研修をしていただいた時にも、講師の先生は職員間の雰囲気が良いことを挙げられる。

しかし、つつい道草をするのを忘れてしまいがちな者もいる。最近になって特に努めて道草をしようと決めている相手は養護教諭や、栄養教諭だ。この二人は、毎月の体重測定や保健指導、保健室に来室する回数や理由、給食後の食器の片付け方や残菜の量から、他の教員が気づかないような児童の様子や学級の雰囲気をつかんでいることが多いからだ。

こんな雰囲気の職員室だが、昨年私が「多文化共生社会の基盤づくり」のテーマを掲げたときにはたいへん消極的に写った。と言うのは、ベテランにあるはずの豊富な経験・柔軟な対応力・厚い信頼が、「多文化共生社会」という将来的課題については全くないからである。その点においては、私自身も含め、全職員が若手と言ってもいいだろう。それは、当時の「意欲はあるんだけど、何をすればいいのか分からない」というあるベテランの言葉にも表れていた。

それでも、道草をし、私自身あれこれ悩んで思い立ったのが、「多文化共生推進月間」として全校で取り組むことだった。毎朝全校で取り組んでいる「朝の歌」に外国語を取り入れることや、朝の職員打ち合わせの時にポルトガル語のワンポイントレッスンをすることは、道草から得た取組である。また、道徳の時間に「国際理解」の内容を全学級にお願いしたところ、職員室中がその話題で大いに盛り上がり、道草の時間も長くなった。

このような取組が功を奏してか、2学期になると、こちらから何も言わないのに、「教室にポルトガル語の掲示をしよう」「学習発表会のテーマを『国際理解』にしよう」「給食時に外国籍児童によるポルトガル語ワンポイントレッスンを放映しよう」「外国籍児童の保護者にポルトガル語で電話してみよう」という職員の声や取組が自然と増えてきた。PTA会長からは卒業式の式辞や祝辞を翻訳してプレゼンして欲しいという要望まであった。職員室内で簡単なポルトガル語も聞こえるようになってきた。

会議や大きな学校行事の後には、校長はみんなをねぎらうために必ず手作りのお菓子を振る舞ってくださる。行儀は悪いが、そのお菓子をいただきながらの道草は格別である。

雑 感

学校改革マネジメントコース2年／勝山市立平泉寺小学校 齋藤 治

学校改革マネジメントコースの一期生として入学し、1年半が経った。「長期実践報告が仕上がるのか」ということが度々頭の中をよぎるようになってきた。

入学するに際し、全国でも数少ない教職大学院の管理職育成コース、管理職に必要な資質、能力などが講義形式で展開されるものと思って、30年ぶりに母校の福井大学を訪れた。しかし、その思いは全く外れていた。実践を行い、その省察を行い、さらに実践を深めていく。これが、福大教職大学院の「学び」なのである。

「学校改革」の実践を行っていきなんて大それたことを自分が行えるのか、一体何を行えばよいのか。しかも実践を行い、長期実践報告にまとめる。4月から教頭になったばかりで、仕事も分からないことが多く、忙しい。正直、2年間まともに務まるのだろうかと思いを持った。

しかし、毎月の合同カンファレンス、夏期集中講座を終える中で「学校改革」の意味が自分なりに理解できてきた。世の中が大きく変わり、学校も様々な課題を抱えるようになってきた。10年前くらいから「子供や保護者が変わってきた」という思いを強く持つようになってきていた。「これまでの指導法では通用しない」という思いもあり、自分なりに指導法を改善もしてきていた。これからは、自分の学校の課題を明らかにし、具体的な対応策をつくり、職員一丸となり取り組んでいくことが、学校に求められる。それが「学校改革」であり、管理職がリーダーシップを発揮し取り組んでいくことが「学校改革マネジメント」なのではないかと考えるようになった。また、課題といっても現に問題として考えられることだけではなく、学校運営をより活性化させるために必要な視点でも考えていく必要があると考えるようになった。

そこで、昨年度より

- ・ 学校評価の在り方と教育課程の改善
- ・ 家庭や地域、児童館との連携
- ・ 職員の育成、教職員の組織づくり

に視点を当て、実践を行ってきている。

合同カンファレンスやラウンドテーブルなどで、その実践を報告し他の院生、教職大学院の先生方から意見をいただく。その意見をもとに、実践を改善していく。その中で自分の実践の理論が徐々に固まったり、実践に自信が持てたりする。また、夏期集中講座で読んだ理論書、実践書と自分の実践理論を照らし合わせてみる。自分の実践理論との共通点や理論の不十分な点が見えてくる。ここでも、自分の実践に自信を持つと共に実践の改善点が見えてくる。

このような「学び」の中で、言葉では上手に表現することはできないが、管理職として必要な資質、能力などが理解できてきているように思える。「理論が先か、実践が先か」という話にもなるが、今では福大教職大学院の「学び」の方式が、自分に合っているという思いが強い。

さらに、合同カンファレンスやラウンドテーブルでは、様々な年代、業種の方達とそれぞれの実践につ

いて話し合う機会を持つことができる。それぞれの分野で課題を前にして実践に取り組んでいる話を聞くと、自分ももう少し頑張ろうという気にもなる。ストレートマスターの院生からは、自分が若かった頃の思いを思い出させてもらうことができる。ミドルの先生方からは、多忙な学校の中で実践に取り組むエネルギーを感じ、管理職として、このような先生方を支えていく視点を持つことの大切さを強く感じる。仕事に疲れた週末であっても、合同カンファレンスやラウンドテーブルに参加すると、仕事へのエネルギーをもらって帰ることができる。

新学習指導要領の施行にともない、小学校では来年度から特別な教科道徳、外国語が先行実施される。また、勤務時間の改善も大きな課題となっている。

「学校改革」がますます必要になってきている。そして、前向きに取り組んでいかなければならない。

「50の手習い」となる教職大学院の「学び」が、教員生活の転機となろうとしている。それでも気になるのが「長期実践報告」である。

インターンシップ/週間カンファレンス報告

葦跡

教職専門性開発コース2年/福井大学教育学部附属義務教育学校・前期課程 福岡 友輝

9月19日、3度目の附属学校での教育実習期間が終わった。学部3年生時、そして昨年と附属での教育実習を重ねるたびに、教職に対する思いが変化し、様々なことを学んできた。インターンシップ(以下インターン)として迎える教育実習を“自分の”教育実習として考えることができるようになったきっかけは、昨年のメンター教諭から「5人目の実習生の気持ちで臨むと得られるものも大きいと思う。」というアドバイスを頂いたことである。インターン生として、実習生をサポートするだけではなく、学び手としての気持ちをもつことで、過去の実践と照らし合わせながら考えることができた。それらが、後の実践につながり、今の長期実践テーマ『授業で創る学級経営』にもつながっている。

今回の教育実習で考えたことは、過去の自分の姿である。3年前の教育実習を振り返ると、“授業”というものに対する考え方に変化が見られたのは、当時の自分の細案の授業後だった。実習の集大成の授業での自分の授業でやりたいことを45分の授業でやってしまう詰め込み、子どもたちならわかっているだろうという思い込み、子どもの言葉ではなく、授業者の言葉で授業をまとめてしまうという押さえ込み。“込み込み込み”である。授業中の子どもたちのポカンとした顔、授業後の「先生、社会って面白くないね」という言葉。子どもたちは正直だった。だが、教師を諦めないで目指していこうという気持ちになれるよう自分を救ったのが、このような目の前の子どもの正直な姿であった。「面白くない」「つまらな

い」「社会って何の意味があるの」これらの言葉や態度から、「じゃ、この子たちが考えることのできる授業はどのようなものか、学んで楽しいって思うためには何が必要か」を考え始めるようになった。そういう意味で“子どもの姿を”大事にした授業を行っていきたくと改めて考えるようになった。終わってもっとちゃんとやっておけばよかったと思うことはよくある話であるが、そう思えるのも、教育実習を通じて自分の無力さを実感できたから、それをなんとかしようと思ひ、教職大学院で学んでいるからであるからこそだと思える。実習生の様々な思いや姿から、過去の自分を投影し、自分が今ここにいる原点を再確認できた。

今回考えたことがもう一つある。インターン生として授業レベルがどこまで求められているのかである。同じ時期に授業を行うことで、実習生と比べられることもあるだろうし、実習生から「何だ、インターン生の授業もたいしたことはないな」と思われることもあるだろうと考えることは自然なことだった。では、比較されるのならば、いっそインターン生だからこそその授業を見せれば良いのではないかと考えた。私たちはよく“インターン生として”と言われることがある。「インターン生として自覚をもって授業を行うように」「インターン生としてサポートできる部分はしてあげる」などである。私たちは“自分たちが考える”インターン生像をそれぞれもって日々の実践に臨んでいるのである。私は、夏の集中講座でインターン生だからこそできる授業とはどのようなものであるかを一度考えた。その時はインターンとは以下のような立場であると考えていた。

- ・ インターン生は担任ではないので、全ての授業を行うわけではない。決められた単元の中でどのような授業を行うのかを考えていく。
- ・ インターン生は教育実習生ではないので、一定の短期間のみ子どもたちに関わるわけではない。長期的な関わりの中で子どもたちを見取ることができる。
- ・ インターン生は講師ではないので、日々の授業準備に追われることはない。教材研究の時間や日々の実践で学んだことを省察できる時間が確保されている。

つまり、担任という目立った存在ではないが、クラスの中で子どもたちに長期的に関わりながら、子どもたちにとってどのような授業が良いのかを省察を繰り返し、考えながら実践を行うことができる。まさにインターン（隠ながら、多くを学び、案を考えていく）である。これを元にして、授業実践を考えることがこれまでの歩みであり、自分のこれからの指針であるということを実習生の授業の様子を見て改めて感じる事ができた。

自分たちはいつまでも一番下にいる存在ではない。春に M1 が入ってきた時に自分たちが上になるという自覚は少なからず感じていたが、所詮は同じ院生であるし、格別差があるわけではないと思っていた。しかし、自分も後輩の姿を見るたびに、「あ、もしかして自分も少しは成長している？」と自己に問いかけることがある。この“成長”は他者がいて初めて感じるものである。まだまだ未熟でひ弱な輩であるが、輩なりにも今の自分につながるものを残してきた。過去や現在と向き合い、足りない自分を考え、これから先をまた見つめる実習期間であった。

道徳

教職専門性開発コース2年／福井大学教育学部附属義務教育学校・後期課程 田中 亮

私たち院生が毎週木曜日に全員で集まり、インターンシップ先での出来事の振り返りや、公教育の意義を探る活動を行う「木曜カンファレンス」というものがある。10月は私を含めたM1, M2, M3を合わせた計10名で「道徳」について話し合う機会を設定し4週に分けて企画を行った。テーマを道徳に設定した理由としては、特別の教科「道徳」が新設されることによりこれからの道徳教育の在り方がどう変わっていくのかが知りたい、という思いからであった。

第1週目には、「あなたにとって道徳とは？」といったテーマで一人ひとりが考える道徳についてのイメージや、自分たちが受けてきた道徳の授業などについて話し合った。ある班では、「道徳は宇宙である」と定義した。一人の人間を宇宙としてとらえていて一人の人間＝その人の道徳観であり、その道徳観の中に愛や規律などの星々がある。その愛や規律の中にも細かく分類できる価値が存在する。道徳の授業では悪い星があった時にその星を壊すこと、または

きれいな星につくり変えること、どれが正解なのか。といった話し合いが行われており、私自身もより広い視点から道徳というものを考えるきっかけになった。

第2週目には、事前に全員が「道徳教育に係る教育課程の改善等について(答申)」を読んだうえで、これからの道徳教育に求められることは何かを探っていた。答申内の文章に、「教育基本法において、教育の目的として人格の完成を目指すことが示されている。人格の基盤となるのが道徳性であり…」といった内容が書かれていた。私たちの班(3人)は、人格の基盤のはずの「道徳性」自体頭で分かっているつもりでも上手く説明できないところから、道徳性って何?といった話が生まれた。すると、3人それぞれの違った考え方である道徳性が意見として出てきた。その中でも共通して「人とかかわる」といったことが3人にあることが理解できた。また答申内の「人として」といったワードについてや「道徳的実践力」についても話し合った。私は、道徳的実践力とは道徳の授業で考えたことを自己の生活に行動することで生かしていくことではないかと考えていたが、同じ班のM1その人自身が授業で考えていることを行動に移せなくても考えているだけでそれは実践じゃないか」といった意見に私自身納得し、自分の考えの幅が広がった。評価のことについて話し合った際のM1の意見で「その道徳の1時間だけで子どもの価値の変容を見ようとするのは絶対に担任だけでは難しいしその時間だけでは変容したかすらわからない」だからこそ小学1年時、2年時、3年時と、同じ道徳的価値判断について毎年違った発達の段階の中で考えることによ

り、ある価値判断でも1年時に考えたものと6年時に考えたものではちがっているのではないか。教師はこのように長い目で子どもの道徳性が養われる過程を評価していくべきである。といった考え方に素直に共感してしまった。

3週目には道徳教育と、道徳の時間それぞれの役割を考えていった。わたしたちの班では道徳教育の中に道徳の時間があり、学校生活の中で出てくる道徳的な場面やものごとを補充・深化・統合して道徳の時間に行っていくようになるといった話が出た。またそれぞれの教科でも道徳性を養うといったことに対して、私は「各教科での専門的な道徳性、例えば社会科で農業を教えるとき自分の県の農業にも触れるといった郷土愛の視点」を想像したが、同じ班のM2は「教科間を通した道徳性のことであり、主体的・対話的で深い学びを支える、グループワークや議論に必要な相手とかかわる上での資質、能力のことではないか」といった考えであった。また、同じ班のM1は「教科それぞれの見方、考え方を生かした道徳性のことじゃない?」と言っていた。このような話し合いの中で私の中でも道徳全体の構造がぼんやりと頭の中で構築されていった。

次週の振り返りで最後の企画になる。私は、これまで自分を含めた30人の院生が考えてきた道徳により私の考えも大きく変容した。それを自分自身で整理するためにも今自分の中での道徳の構造を図に表している最中である。このように他者の価値観から自分の考えに多少なりとも変化が生まれる。このように企画し同年代でこのようなことを考えられることを大切に思いながらあと1週を楽しんでいきたい。

広がった視野に、ピントを合わせる

教職専門性開発コース1年/福井市中藤小学校 松木 巧

最近、日が暮れるのが早くなり、肌寒く感じるが増えてきた。季節は秋。インターンが始まってから春も夏も気がついたら通り過ぎていた。この約半年、私はどのような歩みをしてきたのか。振り返ってみるとしよう。

大学院入学当初、私は自分の目指す教師像として『子ども理解に長けた教師』になりたいと言っていた。これは、授業は子ども理解があつて初めて成り立つ、子どもを理解することで信頼関係が結ばれると

いう、私が大切にしている考え方に基づいてのものである。この考え方をもとに、これからのインターンで、理想とする教師像に近づけるように精進していく、そのはずだった。

特別支援学級で1年生と中心に関わる中で、わざと悪戯をするなどの不適切な行動に対し、注意することが度々あった。しかし手応えを感じない日々の悩みを、毎週木曜日にある週間カンファレンスで打ち明けた。すると、ある先生から「アセスメントが足

りていない。」というコメントをいただいた。この瞬間、大切にしていたはずの子どもをみるということを疎かにしていた自分に気づかされた。もしかしたら、彼の行動の中にはそんな私への不適応から起こした行動もあるのかもしれない。子どものことを分かってやれていなかった、そのための努力が足りていなかった自分が情けなくて、悔しかった。それと同時に、自分の大切にしていたことに気づかせてくれた週間カンファレンスという場所にありがたさを感じた。

それからしばらくして、授業づくりに取り組み始めた。私は特別支援学級の1年生の課題について考えた。そこで、普段彼らが同じような言葉でしか会話しないことに着目し、語彙を増やす活動をしようと考えた。また、ひらがなを書く練習もしていたので、字を書く練習にもつなげられないかと考えて授業をつくった。授業を考えていく中で、『文字』と『音声』と『具体物のイメージ』という3つの要素が結びついて初めて使える語彙になるのではないかと考えた。そこで、手が挙がらなくなった際のヒントとしてイラストを提示することで、それが何かを発音し、授業者の板書を書き取るようにすれば、3つの要素を結び付けられると考えた。

授業内容とともに、子どもたちの意欲をどう引き出すかを主に支援の仕方についても考えた。これまでの学習支援を振り返ると、授業への関心が高い子どもには、次の学習内容を教えることでそれに向けて取り組む場合があった。文字を書くことが苦手な子どもには、形を整えて書けたことを褒めてやると意欲的になることがあった。これより、それぞれの課題に取り組む際、それぞれがやる気になる要因を与えると課題を克服できるのではないかと考えた。そして、そのために子どもの出来不出来や得意不得意、

好き嫌いなどを理解する、すなわち子ども理解を行ってきたのだと考えた。

授業を進めていく上では、授業への関心の高い子どもの意欲を引き出すことで、授業が活発な雰囲気になるように心がけた。彼はひらがなの書き取りにいつも時間がかかるのだが、「早くできたらもうひとつ勉強しよう。」と声をかけると、いつもよりも早く書くことが出来ていた。『書き取りに時間がかかる』という課題を『新しい勉強ができる見通し』という要因によって克服することができた。また、普段独り言が絶えず指示が通らない子どもが絵本好きだったため、イラストを提示することで授業に意識を向けられていた。『授業に意識を向けられない』という課題を『イラストという興味に沿った物の登場』によって少し克服できた。これは、『授業に関心を持たせて参加させたい』という私の課題の克服にもつながったと考えられる。これより、子どもたちが自由時間に触れている物が関心のある物であると改めて気づかされ、それらを活用することで彼らの意欲を引き出せるということが分かった。

週間カンファレンスで自分の大切にしていた部分に気づかされたおかげで、それに基づいた授業実践ができた。そして現在は、子どもの行動の背景や、先生の対応とその背景について考えながらインターンに取り組んでいる。週間カンファレンスには、このように自分の考え方を改めて掘り下げ、明確にする効果がある。また、様々な人の実践とそれを行うに至った考え方を聴き合うことで、新たな考えを知る効果もある。例えるなら、視野を広げつつ、必要に応じた場所にピントを合わせるような感覚だ。今後もインターンと週間カンファレンスの中で、様々な考え方の背景までみえるように語り合い、自分の実践に役立てていきたい。

教職大学院での学びを通して

教職専門性開発コース1年／福井大学教育学部附属義務教育学校・前期課程 新谷 輝

教職大学院に入学して、半年が経った。日々の子ども達との関わりや先生方のお手伝いをさせていただいていく中で、勉強させていただくことばかりで、充実した毎日を送っている。その中でも、特に印象に残っていることは、長期インターンシップとカンファレンスである。

長期インターンシップでは、義務教育学校前期課程の1年生のクラスに入らせていただいている。実

際に、学校現場で子ども達と関わらせていただいていることで、子ども達が抱えている課題や悩みを身近に感じる事ができている。また、今、子ども達が何を必要としているかを考える機会が自然と増えているように感じる。

先日、福井大学から来られた教育実習生と一緒に授業をさせていただいた。今までは、担任の先生がされている授業を横から見させていただく時間が多か

ったため、授業中の先生と子ども達のやり取りや、隣の席の子ども同士のやり取りから、授業中、答えが分かっているにもかかわらず発言をしようとしないうちや、隣の席の友達のノートを何度も見るなどして自分の答えに自信がもてない様子の子どものいることを見つけることができた。また、「子ども達がどのような過程で理解につなげていくのか」という視点をもって考えるように努めていた。

しかし、授業をするために、子ども達の前に立つと、上述したような子ども達一人一人の様子を確認することができなかった。普段、先生が、「〇〇さん、△△はお話を聞くときにすることじゃないよね」や「あと〇人の人が△△をできていません」というように、授業をされていても、子ども達一人一人の様子をきちんと把握されておられることが、改めて、凄いことで、なかなか真似できないことであると感じた。このように、授業を行ってみて、例えば、普段から関わりのある子ども達であっても、「45分間全員と一緒に勉強をする」という目的で関わるとなると、まだまだ経験が足りず、担任の先生のように上手くはできないことの方が多くあると感じた。

カンファレンスでは、同じ教職大学院生の方や様々な学校現場の先生方とお話しさせていただいている。私自身がインターン先で子ども達と関わっていく中で考えていることを話すと、同じグループの先輩や先生方が、ご自身の経験を踏まえてアドバイスをしてくださる。学校現場で経験されたことをお話してくださるので、自身の参考になることがとても多く、毎回のカンファレンスが充実した勉強の場になっていると感じる。

また、木曜カンファレンスでは、数人のグループで授業を作ることも経験できた。その中で、私は小学1年生の国語の物語文の授業を考え、1年生ならではの幼稚園での活動と関連付けた音読の工夫や、他教科とのつながりを意識して音楽と関連付けた活動を取り入れたり、教科の縦と横のつながりを意識して授業作りを行った。さらに、この授業作りを通して、「授業を受けるのは子ども達」や「子ども達が主体的に学べる授業を作らなくてはならない」といった授業を作っていく上で必要な心構えや考え方を再確認することができた。今後、自身が授業づくりを行っていく際にも、これらのことを忘れずに取り組んでいきたいと考える。

合同カンファレンスに参加して

「物怖じせず本音で語る」

教職専門性開発コース2年／福井大学教育学部附属義務教育学校・前期課程 竹内 瑞貴

今回の合同カンファレンスの内容は「新しい世代を支え学びあう」というテーマで現職の先生がたと、新しい世代である私たち院生がセッションで話しあった。この二年目の後期の最初の合同カンファレンスでふと思ったことがある。それは1年目の最初と、今の自分とでは合同カンファレンスの取り組む際の考え方や取り組む姿勢が大きく変わったことだ。昨年度の最初は、合同カンファレンスや木曜カンファレンスなどのセッションで、自分の考えや思いを話すことをせずに、周りからみて当たり前なことや、一般的に正しいと言われるようなことを頭のなかで考えだして話していた。カンファレンスの際に私の口からでてきた言葉は、本当に自分が考えていることや思っている内容とは違っていたということも多々あったのである。セッションで周りの院生

や先生に疑問などを聞かれても、本当に自分の考えていることではないことなので、意見を返せず考えてしまったり黙ってしまったりしていた。また、インターンシップで学んだことを話す際は、起きた出来事などを話すことしかしなかった。その起きた出来事に対して、どういう風に思ったとか、こうするべきだったとか話すことは一切なかった。今考えると自分の考えていることや思っていることを話さなかったのは、カンファレンスで同じテーブルの先生に怒られたら嫌だ。とか、間違った考え方を言ってしまったら恥ずかしい思いをするのではないかとという不安からであったと思う。そのためセッションの内容は深まらず浅いものになってしまった。ここに学びはあったとは到底思えない。

ストレートマスターの院生にとって合同カンファ

レンスは、現職の先生がたの教師としての価値観や考え方である内なる理論を知れるということである。先生がたの内なる理論を知ることによって新たな視点や見解が生まれて、ストレートマスターの内なる理論が育まれていく。そして、私の内なる理論を現職の先生がたに聞いてもらい、アドバイスや、私達若い世代が持っていないような様々な視点からの言葉をいただくことで、私達の内なる理論を振り返り考え直すことが出来る。昨年度の自分は、未熟な内なる理論を表現することが怖く、恥ずかしいも

のだと思っていた。

しかし、今は違う。しっかり自分の言葉で自分の思いを、物怖じせずに語ることが出来ている。その結果、多くの学びがあると実感でき、有意義なものになっていることは間違いない。何より一番感じているのは、本音で本心で語ることによって、先生がたも本音で価値観や考え方を語ってくれるということだ。そのような場が一番の学びになると実感している。まだまだこのよう機会はある。これからも多くの先生がたと語り合っていきたい。

10月合同カンファレンスに参加して

教職専門性開発コース2年／福井大学教育学部附属特別支援学校 廣田 久奈

夏の集中から早くも秋になり、久々の合同カンファレンスとなりました。夏は教員採用試験と集中で一瞬のうちに駆け抜けてしまい、やっと一息つけるかと思うと「長期実践研究報告」という文字が見え、そろそろ書かなければと思う瞬間でもありました。

今回の合同カンファレンスのテーマは「新しい世代を支え学び合う」。私自身、大学から教職大学院に来て、週に何回か学校に行かせていただいている立場なので、周りの先生から多くのことを吸収し考えることが多くあります。一番下っ端な立場である私にとって、とても話しにくいテーマでした。話しにくい理由について、この機会に考えてみると私自身、年上の人とどのように関わっていくのか模索している途中だからかもしれません。2年目に入り、ようやく環境になれた私は、学校でも少しずつわかかわりや考えを持つようになりました。去年1年は？と言われると、何も分からず流れに身をまかせて、教えてもらってという繰り返しで本当に言われるがままだったと思います。1年、様々な新しい環境に触れ、様々な人に出会い、様々なことを話したり教えてもらったりしたことで、2年目に入り子どもたちとのかかわりや実践についての考え方が変わってきたのかなと思います。

松木先生のオリエンテーションの話では、①これ

からどのように教育が進むのか ②若い世代が何をどのように思っているのか という2つの理解が必要であると言っていました。裏を返すと若い世代は、①は共通であり、②はベテランの先生方は何をどのように思っているのか理解する必要があるということです。この話を聞いて、ふと思い出したのが相互理解という言葉でした。ストレートの院生でも難しいなと思うところがたくさんあり、またそれが様々な年代の人とつながるとなるとやはり難しさを感じます。ただ支えてくれる、温かい人たちがいるからこそ、自分の考えを言ったり、関わったりできるのではないかと思います。自分から関わっていくことも必要だと考えます。言葉や関わり方はこれからも勉強していかなければならないと思います。今回合同カンファレンスのグループでの話し合いでは、外国籍の児童についての話ができました。学校内だけでなく視野を広げて人と関わる重要さを知ることができました。視野を広げ、人と協力していくことで、学校自体も明るくなり温かい空間になっていき子供にも良い影響を与えるのだと思います。私自身も今は中途半端な立ち位置にはいますが、自分から人と関わっていき、いろいろな先生方の言葉や指導等吸収していきたいと思っています。

10月月例カンファレンス

学校改革マネジメントコース2年／若狭町立上中中学校 片山 浩

10月のカンファレンスは夏の集中サイクルを終えてからおよそ2か月、久しぶりに集まるカンファレ

ンスである。そして昨年先輩方から聞いた通り、大学で行う最後のカンファレンスであった。始まった頃

は慣れないセッションだったが、回を重ねるごとに4、5人で話し合い聴き合う時間が短く感じられるようになっていった。自分とは全く違う環境で教育に携わっている人たちと話し合い聴き合うことは大変刺激的であり、当たり前だと思っていたことに驚かれたり、教育の世界では共通語だと思っていたことに質問が相次いで戸惑ったり、今までの土曜日では決して経験することがなかった時間を過ごすことができた。

セッションの最初にする自己紹介をとってみても、話を聴いてくれる人が毎回変わるので1から説明が必要なことが多く、少しずつ必要なことだけのように変わってきている。

今回のテーマは「若い世代の経験・若い世代を支えるお互いの経験を聴き合い、若い世代を育てることのできる学校のあり方・コミュニティと組織のあり方を探る。」である。メンバーは大学院の先生と私と20代3人。今の職場で若い世代をどう育てているかを話せばいいのかと思っていたところ「マネジメントコースの方にこのセッションをコーディネートしてほしい。」と言われた。去年は11月のカンファレンスでファシリテーターをするように言われたが、その時のテーマは「他校の研究を支える。」だったので、メンバーにとって共有するものがはっきりしていたと思うが、今回は共有できそうに感じられなかった。松木先生のお話の中にも「若い世代の考えが分からないと言うことがベテランの声」とあったので、第一声を「若い世代の話聞かせてほしい」にした。しかしなかなか話が出にくいだろうと予想し、自分から何か切り出そうか考えていると、ぼつぼつと話が始まってきた。

立場や仕事場は全く違うが、同じような経験や意見になると次々と話が続き、途中からは時計を見ることもなくなっていた。ファシリテーターではあったが、それ以外は立場や年齢の違いをあまり意識せず話し合い聴き合いができたよい時間となった。

今までに自分が参加したセッションで終了後に満足感のあるものは決まってファシリテーターの進め方がうまく、つつい話してしまったりどンドン質

問できたりした。話す聴くを繰り返すととても疲れるのだが、一体感や満足感がそれを軽減することも経験した。もちろんそうでないセッションも経験した。ファシリテーターが司会進行のみ、セッション中でも一本線を引いて遠くにおられる感じ、など会話が一方通行になりがちで、「何とかしないと」と思う気持ちが先行し、心身ともにとても疲れる時間であった。

利害関係がないメンバーがお互いの課題を持ち寄り話し合い、聴き合う。過去の経験をバックにこうすればよいという話を聞く場ではなく、自分ならこうする、自分の時とはここが違うのでこうなるのではないかなど、互いに当事者意識を持って話し合い聴き合う場となるとセッションがうまくいったと感じ、そうでない時は、期待していた答えにたどり着かないどころか、メンバーが始めから終わりまでいい関係になれなかったように感じられた。

もちろん自分がすればよかったことはたくさんあり、知りたいことは自分から聞けばよかっただけであり、ファシリテーターが自分の思うような展開に進めてくれないなら、自分で切り出せばよかっただけであった。そう考えると最初の自己紹介はただの自己紹介ではなく、ファシリテーターにとっても話し手にとってもセッションで一体感や満足感を得るための大切な準備であることを強く感じる。

気がつけば、普段はなかなか話すことのない自分が20代の頃思ったり考えたりしていたことを素直に話していた。ファシリテーターをしているはずが3人により雰囲気を作ってもらっていたのだ。

日常的に職場で20代の職員と利害関係のない状態で話をしたり聞いたりするのは簡単ではないかもしれないが、今回のカンファレンスで、皆さんしっかりした意見を持ち、少ないながらも誰も経験したことのない教育に携わるそれぞれの毎日を送っている。「若い世代の経験・若い世代を支えるお互いの経験を聴き合い、若い世代を育てることのできる学校のあり方・コミュニティと組織のあり方を探る。」話し合い聴き合うことで今回のテーマの答えに近づいたように感じた

研究集会案内

教育実践研究 フォーラム

in 長崎大学

平成 29 年 11 月 11 日 (土)

実践研究 長崎ラウンドテーブル
13:00~16:30 ラウンドテーブル

平成 29 年 11 月 12 日 (日)

教育実践と省察のコミュニティ 2017
9:00~12:40 実践研究 ポスター発表
13:30~16:00 シンポジウム

長崎大学文教キャンパス

教育学部教育工学実験教室 (SCS 教室)・11 番教室 他

長崎大学教育学部では、教育委員会との連携による課題把握をふまえ、地域の教育課題等に対応した実践的教育研究力の強化をねらい、附属学校園及び地域の学校や教育委員会との協働による教育実践研究の組織的な展開に取り組んで参りました。

教育学部・教育学研究科及び附属学校園の教育実践研究の成果を地域に発信し、皆様と新しい教育実践について協議し、ともに考える場として、今年度も教育実践研究フォーラム in 長崎大学を実施致します。皆様のご参加を心よりお待ちしております。

申込方法: 本フォーラムに参加を希望される方(長崎大学在籍者は除く)は、下記HPよりお申込みください。

<https://goo.gl/forms/x1NcEe4QKhZxBead2>

(長崎大学教育学部 HP にリンクがあります。当日でも参加可能です。)



主催: 長崎大学教育学部、長崎大学大学院教育学研究科教職実践専攻

共催: 福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻、教師教育改革コラボレーション

後援: 長崎県教育委員会、長崎市教育委員会

ポスターデザイン: 長崎大学教育学部研究科
山内 実希 先生 制作

11月11日(土) 実践研究 長崎ラウンドテーブル

13:00～16:30 教育実践を少人数のグループで聴き合い共有・探求するラウンドテーブル

ラウンドテーブルとは・・・少人数のグループで日常の実践を語り合うことです。本ラウンドテーブルでは報告者の実践報告を受けて、新たな知見と実践の省察をグループ内で共有し合い、今後の実践の展開を共に探求していきます。

18:00～20:00 懇親会

11月12日(日) 教育実践と省察のコミュニティ 2017

テーマ「新しい時代の教育実践をめざして」

9:00～10:30 教職大学院生のポスターセッション

教育学研究科教職実践専攻研究成果：平成29年度修了予定大学院生
(シンポジストの先生も、コメンテーターとして出席されます)

10:40～11:25 教育学部教員、附属学校園教員、研究協力教員等によるポスターセッション

11:40～12:40 院生によるポスターセッションを受けての総括

コメンテーター

教職実践専攻実習協力校(附属学校)の視点から

富野 聡 氏(長崎大学教育学部附属小学校 校長)

森 浩司 氏(長崎大学教育学部附属中学校 校長)

佐藤 凡人 氏(長崎大学教育学部附属特別支援学校 校長)

他大学の教職大学院の視点から

渡辺 貴裕 氏(東京学芸大学教職大学院 准教授)

13:30～16:00 シンポジウム「これからの道徳教育について、考え、議論する」
—「特別の教科 道徳」の完全実施に向けて—

シンポジスト

松下 良平 氏(武庫川女子大学文学部教育学科 教授)

服部 敬一 氏(大阪市立豊仁小学校 校長)

指定討論者

山岸 賢一郎 氏(長崎大学教育学部 准教授)

問い合わせ：長崎大学教育学部・大学院教育学研究科

副学部長 吉田 ゆり TEL: 095-819-2394

ポスターデザイン：長崎大学教育学部
吉田 ゆり、山岸 賢一郎、山田 浩二

12/1(金) 福井大学教育学部附属特別支援学校 公開研究会

◆研究テーマ 子ども・大人が協働する学校生活づくり
～つながりの中で主体的に活動する姿を目指して～

◆期 日 平成29年12月 1日 (金)
◆会 場 福井大学教育学部附属特別支援学校
◆日 程

12:40 13:10 14:00 14:10 15:00 15:10 17:00
受付 授業公開 移動 全体会 移動 学部研究会・助言

◆内 容

●授業公開 (13:10～14:00)

学 部 「活動形態」	活動集団 (会場)	活動名	指導者名
小学部 「のびのび タイム」	小学部 1組 (小1組 教室)	レストランごっこをしよう	森阪香織 伊藤はる香 島田稚佳
	小学部 2組 (小2組 教室)	自分たちで2組遊びをしよう	常廣和美 芝智美 堀江春那
	小学部 3組 (小3組 教室)	すごろく遊びをしよう	岡部博文 篠田英美 中嶋教恵
中学部 「くらし」	中学部 1組 (中1組 教室)	楽器を作ろう	船谷友代 野瀬雅代 多田哲也
	中学部 2組 (中学部ホーム)	自分たちのカフェを開こう	広瀬貴子 久保文 山口真生
	中学部 3組 (中3組 教室)	ウサギを飼おう ～ももちゃんのために柵を作ろう～	松村幸恵 小嵐英輔 松山千夏
高等部 「くらし」	生活 1班 (高等部ホーム)	ビジネスマナーを学ぼう	岩佐成樹 天方和也 大坂真喜子
	生活 2班 (高B 教室)	人と気持ちよく過ごすための スキルを学ぼう	加藤真由 今田めぐみ 仲村孝子 北條哲理
	生活 3班 (高C 教室)	おもてなしをしよう	服部裕之 藤井衣利子 吉田朋子

●全体会 (14:10～15:00)

研究概要説明

研究助言 全体助言者 新井豊吉 准教授 (福井大学教職大学院)

◆学部研究会 (15:10～17:00)

	研究助言者	研究協力者
小学部	山本哲也 (福井市教育委員会 指導主事) 小嵐恵子 (福井大学教職大学院 客員教授) 荒木良子 (福井大学教職大学院 准教授)	佐々木隆子 (福井県立南越特別支援学校 教諭) 大橋武史 (福井大学教育学部附属義務教育学校 前期課程 教諭) 坂ノ上忍 (福井大学教育学部附属幼稚園 教諭)
中学部	岩永英子 (福井県特別支援教育センター指導主事) 岸野麻衣 (福井大学教職大学院 准教授) 松井富美恵 (福井大学教職大学院 非常勤講師)	千秋百花 (明道中学校特別支援学級 教諭) 綿谷明菜 (福井大学教育学部附属義務教育学校 後期課程 養護教諭)
高等部	大崎忠久 (福井県教育庁高校教育課 主任) 廣澤愛子 (福井大学教職大学院 准教授) 小杉真一郎 (福井大学教職大学院 准教授)	伊原豊志 (福井県発達障害児者支援センター スクラム福井 副センター長) 近藤喜世美 (福井県立福井東特別支援学校 教諭)

※敬称は省略させていただきます。()内は所属、職名です。

※詳細・お申し込みに関しては、附属特別支援学校ホームページをご覧ください。

Schedule

- 11/4 Sat 合同カンファレンス (A 日程)
11/11 Sat 合同カンファレンス (B 日程)

【編集後記】最近、友人の結婚祝いのために短い動画を作成しました。お祝いのために作ったものですが、不思議と作ったことで癒される自分もいて驚きでした。何かを作り上げるというのは日常ではなかなか体験しがたい、そしてそれゆえに心のどこかで渴望していることなのかもしれません。ニュースレターの完成が癒やしにつながるのか、その問いについては紙幅の関係でまたの機会に。(綾城)

教職大学院 Newsletter **No.104**

2017.11.1 内報版発行
2017.11.11 公開版発行

編集・発行・印刷
福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻
教職大学院 Newsletter 編集委員会
〒910-8507 福井市文京 3-9-1
dpdtfukui@yahoo.co.jp
